

V26a

## ALMA データ・アーカイブの現在の状況および今後の予定

森田 英輔、中村 光志、パンタ・ポーラ・ラズ、渡辺 学、小杉 城治（国立天文台）

チリの山頂施設（AOS）に設置されているALMA望遠鏡で観測されたデータは、逐次ネットワーク経由で山麓施設（OSF）のデータ・アーカイブに一時的に保存された後、サンチャゴ中央事務所（SCO）のデータ・アーカイブに複製され、さらに、そこを拠点として日米欧の各地域センターのデータ・アーカイブに恒久的に複製される。データがアーカイブされる際は、観測プロジェクトの内容や観測データのメタ情報等はリレーショナルデータベース（RDBMS）に保存され、バイナリ形式の観測データはヨーロッパ南天天文台（ESO）が開発したファイル管理システムNGAS（Next Generation Archive Management System）に保存される。RDBMSのデータはレプリケーションと呼ばれる仕組みによって、バイナリ形式のデータはミラーリングと呼ばれる仕組みによって、各地域センターのデータ・アーカイブに複製される。日本では、これらのサーバーは国立天文台三鷹にある東アジア地域センター（EAARC=East-Asian ALMA Regional Center）の計算機室で運用・管理される。Full運用時にデータ・アーカイブに蓄積されるデータ量は、1日当たり約500GB、1年では約200TBに抑えられる。蓄積されたデータは、ユーザー・ポータルというWebサイトを通じてALMAユーザーに提供される。ユーザー・ポータルでは、最新情報の確認、プロジェクト進捗状況の確認、各種ツールおよび観測終了後の観測データのダウンロードといった機能が提供される。観測者（PI）の占有期間は1年であり、占有期間を終了した観測データは一般公開される。本講演では、ALMAデータ・アーカイブの現在の状況および今後の予定について説明する。